

宝酒造 緑字企業報告書 ステークホルダーミーティング

宝酒造では、これまで発行してきた「緑字決算報告書」から「緑字企業報告書」へのリニューアルを機に、ステークホルダーミーティングを開催しました。

宝酒造は、地球の「いきいき」を守り、ステークホルダーの皆様に「いきいき」をお届けする緑字企業をめざし、新たな第一歩を踏み出しました。社会から信頼され、必要とされる企業であるためには何が求められているのか、京都CSR研究会の方々にお集まりいただき、さまざまなステークホルダーの立場からご意見をお伺いしました。

ステークホルダーミーティングの概要

■開催日時:2005年6月27日(月) 13:00~15:00

■場所:宝酒造本社

■内容:

- 1.宝酒造からのご挨拶
- 2.参加者自己紹介
- 3.宝酒造から報告書についての説明
- 4.ディスカッション

- (1) 報告書を読んだ感想(良い点、悪い点)
- (2) 社会から信頼される企業であるために期待すること

■参加者:

京都CSR研究会 4名

宝酒造 7名(環境部門5名、コンプライアンス部門(編集委員)1名、人事部門(事務局)1名)

■司会:筑紫 透(株)ゼネラル・プレス サステナビリティ・コミュニケーション事業部 企画調査室 主任研究員



● 京都CSR研究会

京都における「企業の社会的責任(CSR)」の実践例を学ぶと同時に、経営戦略への取り込み方や、異なるステークホルダーとの協業方法などを研究し、「京都発のCSR」を実践的に広げることが目的とする研究会。メンバーは企業、NPO、行政、大学、マスメディアなどの幅広い分野に在籍する個人から構成され、2003年10月の第1回研究会以来、月例会を重ねている。

ステークホルダーからの提言

● CSR(企業の社会的責任)の意識を全社員に浸透させてほしい
CSR推進のためには、トップのコミットメントの実現に向けて、全社員がCSRに対する理解を深め、同じ方向を向いて行動することが今後の課題である。そのためには基本方針を常に見直し、教育や研修などのさらなる強化が望まれる。

● 京都という地域性を大切に

日本の食文化を担ってきた宝酒造として、その原点である創業の地・京都という地域性を見つめ直してもらいたい。今後グローバル企業として一層の躍進を遂げるためにも、まず地元で信頼される企業であることが重要である。

● 未来への投資として社会性を強化

CSRとは、環境・社会・経済の3つのバランスがとれること。このうち社会性についてはどの企業もまだ議論が始まったばかりだが、一日も早く自分たちには何が不足しているのかを洗い出し、その方針やそれに基づく具体的な指針を定め活動してもらいたい。

● Next TaKaRaのビジョンを明確に

現在の取り組みだけでなく、どのようにステークホルダーを捉えてどのような関係性を築こうとしているのか、社会的な課題に対してどのように関わっていけるのか、これからの宝酒造のあり方とその達成に向けての取り組みをステークホルダーに明示することが企業の信頼性を高める。

● NPOやNGOとの連携を

先進企業として、CSRの一環である社会貢献活動にも積極的に取り組んでほしい。地域のNPOやNGOと連携し、金銭的寄付だけでなく、施設や人材、技術など宝酒造の経営資源を活用した支援活動を幅広く展開することが、社会や地域に貢献することにつながる。

企業価値向上のために “社会性”と“経済性”の両立を



京都文教大学
人間学部 現代社会学科
教授 島本 晴一郎様

今回の報告書は、社員や取引先などさまざまなステークホルダーの生の声を取り入れて、環境や社会面での具体的な取り組みが語られている点を高く評価します。

宝酒造には創業以来培ってきた企業価値があります。それをさらに発展させていくためにはCSRを費用ではなく投資と考え、長期経営戦略の核に据えることが必要です。この経営戦略に沿って常に社会性を意識しながらアプローチを考え、社会的活動をより明確に具現化し、全社一丸となって取り組んでいけば、企業の安定性や社会からの信頼感がより一層強化されるのではないのでしょうか。

宝酒造がどのようにして企業価値を高めることに成功し、今後どのように高めようとしているかについて具体的に発信するのはもちろんですが、未だ実現できていないものは何で、それはどのような理由によるのかを包み隠さず情報公開することが報告書の信頼性を高めていくことになると 생각합니다。

地域のNPOと連携した活動を

特定非営利活動法人
きょうとNPOセンター
チーフ事業コーディネーター
藤野 正弘様



京都のNPOを支援する立場としては、先進企業としての宝酒造には、地域のNPOやNGOと連携した社会貢献活動の展開を期待します。工場の敷地の一部をバザーや音楽の練習などで市民に開放するなど身近なところから始めれば、もっと幅広い独自の活動になると思います。そのためにはボランティア参加のための社内体制や制度の現状についても具体的に報告していただきたいですね。

今回はCSRへの意識の高まりが感じられましたが、目標値に対してどれだけ成果を上げたのかを明示すること、企業として報告しにくい情報もすべて公開した方が企業の透明性は高まると思います。またグローバルを視野に入れると海外の子会社も雇用や労働について日本と同じ基準で報告してほしいですね。

京都の独自性を活かすグローバル企業に

株式会社 島津製作所
環境・安全推進室
専門課長 天野 輝芳様



宝酒造の緑字決算は、数値化しにくいことを数値化したことに意義があり、企業の環境指標として日本だけでなく、世界のスタンダードにもなり得るものだと思います。今回の報告書の内容についても必要な項目が網羅されており、非常にバランスのとれた企業活動をされている印象を受けます。

ただ同じ京都の企業として、もっともっと地域密着の活動を展開してほしいですね。まず地域で信頼されることがグローバル市場で信頼されることにつながると思いますから。

信頼される企業であり続けるためには、社員一人ひとりが経営方針に基づいて経済的にも環境的にも社会的にも地に足のついた地道な活動を継続して行うこと、そしてそれらの活動を正しく情報開示していくことが大切だと思います。

Next TaKaRaに期待します

立命館大学 大学院
経営学研究科
櫻井 暁子様



宝酒造の緑字決算報告書はずっと拝見していますが、今回の報告書では環境への配慮が商品としてきちんと実現されていることがわかりやすく報告されており、多くの方々に宝酒造の環境に対する強い思いが伝わるとと思います。

報告書は、宝酒造の今とこれからを報告するものです。何を報告するかより、なぜ報告するのかという問題意識とビジョンをもち、昨年度とは違う点、今年度はどこに重点を置いて取り組んだか、そして宝酒造として次はどういう方向へ向かっていくのかを明確にしてほしいと思います。

お客様や社会とのコミュニケーションをより深め、確固とした信頼関係を築き上げるためにも、ステークホルダーのみなさんと共通点と相違点を見極め、その距離を縮めた先にあるNext TaKaRaに期待しています。

緑字企業としての第一歩を踏み出して

宝酒造株式会社
環境広報部長 中嶋 哲^(※)



大変貴重なご意見をいただきありがとうございました。当社は、1998年から緑字決算報告書を発行し、2003年からは同報告書の中で社会的活動についても開示してまいりました。今回緑字企業としての第一歩を踏み出すにあたり、現在何が不足しているか、これから何をすべきかを改めて深く考える契機となりました。

宝酒造は天保13年(1842年)創業という長い歴史をもち、京都はもとより日本の食文化の発展に貢献してまいりました。これからも日本の社会になくはならない企業として、またグローバルに羽ばたく企業としてさらに飛躍を遂げるためにも、地域や社会の要請に応じて、より高次の社会的責任を果たす企業活動をめざします。そして一方的に情報発信を行うのではなく、ステークホルダーの皆様と継続的にコミュニケーションを図り、より一層の評価をいただけるよう努力してまいります。

(※) 現・酒類・食品事業統括本部 副本部長(機能性食品担当)